

資料

周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇 (1)

小川利康編

本稿は周作人（一八八五—一九六七年）と松枝茂夫（中国文学者、一九〇五—一九九五年〔明治三八—平成七年〕）との間で、戦前戦後三十余年にわたって交わされた往復書簡を整理校訂し、必要な注釈を施したものである。このたび双方の遺族から公刊許諾を得て公開する。往復書簡全体では合計七万字ほどに上るため、戦前編、戦後編に分割して順次掲載してゆく。なお、書簡の内容を最も忠実に伝える影印版も中国で出版を準備中であるが、それとは別に研究資料として利用しやすい活字排印版を先行公開することにした。今回は初年度分の一九三六年の九通を掲載する。

往復書簡は一九三六年（昭和十一年）に松枝茂夫が初めて周作人に書き送った第一通目から一九六四年（昭和三十九年・以下西暦のみを示す）に至るまで、十年間の中断をはさみつつも、三十年弱にわたって交わされた貴重な一次資料である。これまで周作人書簡は主なものだけでも、鮑耀明『周作人晚年書信』（真文化出版公司一九九七年、

旧版『周作人晚年手札一百封』香港太平洋図書公司一九七二年）、李吉如『周曹通信集』（第一、二輯、南天書業公司一九七三年）、『周作人俞平伯往来書札影真』（北京圖書館出版社、一九九九年六月版）、『江紹原藏近代名人書札』（江小蕙編、中華書局二〇〇六年）などがあるが、内容分量において、これらと十分比肩しうるものといえるだろう。本稿に収録する書簡は、松枝茂夫遺族宅より提供を受けた周作人の書簡百十六通（中文）に加え、周作人遺族宅より提供を受けた松枝茂夫の書簡三十六通（日文）である。ここでは、その全てを原語のまま可能な限り忠実に活字に翻刻し、編者が最低限必要な注記を加えた。周作人書簡の内容は既に日本における周作人研究者の間では周知の存在であったが、後者は二〇〇三年三月、編者が北京に周作人遺族を訪ね、周作人書簡公刊についての許諾を得た際に、その存在を知らされたものであり、今回初めて公開されるものである。⁽¹⁾

松枝茂夫について

松枝茂夫の生涯については、飯倉照平編『松枝茂夫文集』（全二巻、研文出版一九九九年）に収録する略年譜・著作年譜に詳しい。ここではその年譜に沿って概要のみを記す。

松枝茂夫は旧制福岡高校在学中より『紅樓夢』に関心を寄せ、東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。在学中からしばしば中華留日基督教青年會館の中文書店に通い、創造社の作家や周作人の作品に触れる。まだ同時代の中国文学の価値などほとんど認められていなかった頃のことである。卒業後は北京に一年余り留学し、帰国後の一九三四年（昭和九年）より、中国文学研究会に参加する。ここで竹内好、武田泰淳、増田渉、飯塚朗らと面識を得て、『中国文学月報』に林語堂や周作人など、現代文学に関する文章を発表し始める。後年、松枝茂夫自らの生涯を回想して「半生、潦倒す紅樓夢、一向（ひたすら）傾心す周作人」（「字並べ遊び」一九七三年）と述べるように、

古典文学では『紅樓夢』、現代文学では周作人に深く傾倒し、生涯その翻訳に全力を傾注することとなった。以来、周作人の翻訳書（単行本）としては以下の書がある。⁽²⁾

『北京の菓子』（山本書店一九三六年）

『周作人随筆集』（改造社一九三八年）

『中国新文学之源流』（文求堂一九三九年）

『周作人文芸随筆抄』（富山房一九四〇年）

『瓜豆集』（創元社一九四〇年）

『結縁豆』（実業之日本社一九四四年）

このほかに中国語教科書で一部翻訳、注釈を含むものとして、下記のものがある。

『支那現代文』（漢文学講座第四卷、共立社一九三三年）

『周作人随筆抄』（文求堂一九三九年）

以上はいずれも戦前のものである。周知のように、周作人は日中戦争中の対日協力の罪により、日本敗戦後は「漢奸」の汚名を着せられ、結果、様々な制約から翻訳を出すことは困難になった。戦後新たに翻訳刊行されたのはただ一冊『鲁迅の故家』（今村与志雄との共訳、筑摩書房一九五五年）のみに止まる。

晩年、松枝茂夫は最後の仕事として、周作人の翻訳改訂を楽しみにしていたというが、着手したときには既に齢八十を越え、体力気力の衰えは争えず、ついに改訂の完成を見ることはなかった。最も信頼する木山英雄（一橋大学名誉教授）に後事を託し、一九九五年秋に逝去。没後、『周作人随筆』（富山房百科文庫一九九六年）が刊行されている（同書あとがきによる）。

往復書簡の概要

松枝茂夫が周作人との文通を始めたのは、一九三六年三月九日のことで、東京はちょうど二・二六事件で戒厳令下にあつて、緊迫した雰囲気に包まれていた時期である。

当時の松枝茂夫は留学から帰国したのちも定職が決まらず、東京で非常勤講師をつとめながら暮らしていた。当時の風潮からすれば、周作人の翻訳が必ずしも定職を得るために有利な仕事ではなかったことは容易に想像できるが、中国文学研究会のメンバーの存在も与つて、現代文学への傾斜を強めていったのではないかと想像される。

飯倉照平編になる略年譜によれば、一九三五年の五、六月頃から増田渉との近所づきあいの縁で『支那小説史』（サイレン社一九三五年七月）の翻訳を手伝つたという。後々まで深く私淑する増田渉との関係はこの時期から始まり、当時から相当の刺激を受け、自らも本格的に周作人に取り組む気持ちをも固めたと推測される。一九三五年秋には評論「周作人先生の立場」（支那語学会『支那語学報』創刊号、文求堂）を、そして、一九三六年三月には翻訳「『雨天の書』抄」（『文芸懇話会』一卷三号）を発表している。勇を鼓して手紙を出すに至つたのも、こうした一連の仕事の延長線上からであろう。

詳しくは松枝自身の書簡に譲るが、これ以前にも周作人と直接面談する機会は何度もあつたにも係わらず、控えめな氏は一度ならず二度も機会を逸している。一度目は北京留学時で、恩師の東京帝国大学教授服部宇之吉、竹田復の紹介状を携えていたにもかかわらず果せず、二度目は一九三四年の周作人訪日の際で、歓迎の宴に列しながらとうとう最後まで話しかけることができなかつたという。

こうした経緯を経て、容易ならざる決意で寄せられた書簡に対し、周作人は直ちに返信した。それは短いけれど

戦前篇	松枝	周作人	年計
1936年	5通	4通	9通
1937年	1通	3通	4通
1938年	なし	5通	5通
1939年	なし	5通	5通
1940年	7通	12通	19通
1942年	3通	3通	6通
1943年	3通	8通	11通
1944年	3通	2通	5通
合計	23通	42通	65通

は双方が中国語で書き合っていたものとはかり思いこんでいた。これが勝手な思い込みであったことが、今回周作人遺族から提供された松枝書簡によって明らかになった。松枝書簡については、今後の資料整理の過程でまだ発見される可能性もあるが、現時点で整理済みの書簡の内訳は上掲の通りである。

この時期の主たる話題は、周作人の作品翻訳上の問題で占められている。松枝が疑問を提出し、周が回答する形がほとんどで、『中国小説史略』の翻訳について、魯迅と増田渉との間で交わした書簡（『魯迅・増田渉師弟答問集』汲古書院一九八九年）を彷彿とさせる。この書面問答の成果は、『北京の菓子』、『周作人随筆集』や教科書『周作人随筆抄』に反映されており、当初『文芸懇談会』に掲載された「烏篷船」などの訳文は単行本収録の際に相当訂正されていることが分かる。書簡の具体的な内容に即した調査は、松枝茂夫の周作人理解を検討する上で必要不可欠であるが、現時点では不十分であるため、後日を期したい。

も好意に満ちたものであり、翻訳上の問題点があれば遠慮無く問い合わせたいと告げるものであった。この書簡を皮切りに以後、戦前編だけでも、周作人から四十二通の書簡が寄せられ、松枝茂夫からも同数以上の書簡の往還があった（現存するのは二十三通）と考えられるが、これほどの分量になるうとはお互い予想外のことであったろう。⁽³⁾

初めての書簡往来以降、二人の間では、互いに母語で手紙を寄せ合うという形態で一貫している。双方が日中両語に通じているからこそ可能になったことであるが、従来周作人書簡の存在のみ知られていた当初、筆者

今回、書簡を公開するまでに多くの方の援助があった。そもその端緒は二〇〇一年に大学より北京大学交換研究員として派遣され、彼の地に滞在した際に、周作人研究者である止庵氏の知遇を得たことに始まる。その紹介の労を執つてくださったのは陳漱渝（元魯迅博物館副館長）氏であった。数回にわたる止庵氏との懇談のなかで、松枝茂夫書簡の公刊が具体化し、止庵氏から周作人の遺族である張葵芳女史（周作人長男の周豊一夫人）、周吉宜氏（周作人の長孫）を紹介され、何回かの訪問を経て、松枝茂夫書簡が発見されたことは望外の喜びであった。

さらに書簡の入力作業は、二〇〇三年末より学生諸君の協力を得てようやく完成した。判読困難な手書き文字の入力はかなり難渋したが、主として以下の四名の協力を得て完成させることが出来た。記して謝意を表したい（いずれも所属は二〇〇三年当時のもの）。

鄒敏（早稲田大学日本語教育研究科）、尹明（早稲田大学理工学部研究科）、

徐錚（早稲田大学文学部）、大野友里江（早稲田大学商学部）

このほか、校閲者として、ご協力いただいたのは次の方々である。

止庵（周作人自編文集編者）

趙京華（中国社会科学院文学研究所）

張葵芳、周吉宜（周作人遺族）

飯倉照平（東京都立大学名誉教授）

とくに飯倉先生には松枝家御遺族との仲介から序文執筆に至るまで終始本書の完成に温かいご指導をいただいた。ここに心より御礼申し上げる。

二〇〇七年一月一三日、松枝茂夫夫人、ナヲ女史が逝去された。

往来書簡の整理校訂作業のため、お宅にお邪魔する編者に一再ならず酒食を振る舞っては労をねぎらってください。その暖かいお心に改めて衷心より御礼申し上げると共にご冥福をお祈りする。本稿の完成をお目に掛けられなかったことは痛恨の極みである。(二〇〇七年一月二二日追記)

表記、体裁について

- ・ 書簡には整理の便宜上、西暦による日時で通し番号を付け、数字の末尾には松枝茂夫書簡にはMを、周作人書簡にはZを付して区別した。なお、日時は書簡文中に記された日時を優先し、もし文中に日時がない場合は郵便局の消印の日時に拠った。例…一九三六年三月九日松枝書簡↓19360309M
- ・ 表記は極力原文のままとしたが、句読点、カギ括弧は読みやすさを考慮して、必要最低限追加し、促音の「っ」「ゃ」なども小文字に改めた。段落ごとの字下げも同様に編者の判断で行ったが、段落分けについては原文に従っている。
- ・ 句読点、カギ括弧など表記法については、日中間で違いを残し、統一していない。例えば、中国語の文中における丸付き文字は原文表記を尊重してそのままとしているので、取消線を意味している。
- ・ 周作人の原文理解には注釈が必要と思われる箇所も含まれているが、本稿では煩を避けて松枝茂夫、周作人の生平年に関する事実について注記するだけに止めた。
- ・ 明かな誤記と思われるところには、別途注記でその旨明示した。
- ・ 判読が困難なものは、その旨注記で記した。近い将来に書簡集が影印で刊行されることを期待している。

一九三六年

19360309M 【松枝茂夫↓周作人】⁽⁴⁾

周作人先生…

突然未知の小生がかういふお手紙を差し上げますのは恚に無躰けな事と自分でも考へるのですが、しかし小生自身としては久しい前からの懸案で今日となつてやつと決心がついたのをかへすべくも残念と存じてをる次第でございます。

もう五年も前の話になりますが、小生は学校を卒業するとすぐ北京に遊学いたしました。その節、服部宇之吉、竹田復の両先生から先生へのご紹介状をいたゞいてまゐつたのですが、極端に引込思案で人を怕はがる性質から、心から私淑する先生をその一年半の滞在の間つひにお訪ねし得なかつたのでございます。一昨年夏、先生が東京においでになった時⁽⁵⁾もたゞ遠くからお姿を拝しただけで、それだけでも渴望の幾分を醫し得たことは幸ひでしたが、でも親しく御示教を仰ぎ得なかつたのは寂しうございました。(中國文学研究会の一人として山水樓の御歓迎宴に列つたのです)

ついで昨夏、閑を得て、⁽⁶⁾『知堂文集』の殆ど大部分を試みに日本語に譯してみました。先生の御文章を外国語に移すことの困難なこと、殊に浅学不文小生の如きの到底能くし得るところでないことは、自分でもよくよくわかつてゐるつもりですが、当然紹介せらるべくして一向せられず、たゞ御名前のみ有名であるだけなのを日頃あきたら

ず思ひ、では俺がやらうかとあられもない野心を懐くやうになったのです。でもその『知堂文集』の反譯にしても、小生に解せられぬ語句があまり多いため、その時もよほどお手紙をさし上げてお質ねしたいと熱心に思ひつめたのでした。又、れいの引込思案から断念して、原稿もそれなりに放りだしてしまつたのでございます。

こんど『文藝懇話会』から何か支那の隨筆をと依頼され、早速その舊稿をとりだしてうち五篇だけ選んで「雨天の書」抄と題して送りました。⁽⁷⁾ (少し題名は実際にそぐはないのですけれども「雨天の書」といふ名が好きでしたから) この五篇を選んだ標準は、たゞ小生にとつて割に意義不明の箇所が少いからに外なりません。少いと申しましても比較的話で、よくわからぬまゝに意識してゴマカした箇所も実は少くないのでございます。別便を以て同誌をお送り申し上げました。若しも金を點じて鉄と成した小生の不文を御寛假になり誤譯その他の御指教を賜ることができましたならば、小生の喜びこれに如くものほごいませぬ。なほ甚だ無理な申し出で恐縮いたしますが、何とぞ右の舊稿を整理し、書き足すべきを書き足し先生のお許しを得た上、相当な本屋から出版いたしたい希望をいだいてをります。たゞ小生の浅学ゆゑ、先生をあやまることなきやとそれだけが心配でございます。しかし先生の反譯は無ければなりません。今日まで出なかつたのが實際奇怪な事と思ふのです。小生の力の及ぶかぎり如何様な面倒もよろこんでいたす覚悟でございますから、先生に對してはまことに御迷惑の御事と存じますが、小生の微意の在るところをお察し下さいまして、どうかお許し下さいませんでせうか。くれぐれもお願ひ申し上げます。

なほ『文藝懇話会』と同封にて『支那語学報』⁽⁸⁾をお送り申しました。これは昨秋、文求堂主人から原稿をはたら義理上ことわりかねてあのやうな拙文を載せたので、未熟な、極めてまづい文なので人に見られるのが羞づかしくてならず、あの時すぐ先生にお送りすることがどうしても出来なかつたのでございます。今恥を忍んでついでにお送り申し上げました。

なほ又、三四年前『漢文学講座』（共立社）に『支那現代文』⁽¹⁰⁾の一科を受持ちました節、「西山小品」のうち「一個鄉民的死」と「賣汽水的人」の二篇を譯注したことがございます。原本が得られず何でも商務出版の中学國語教科書から譯したのですが、あれはもともと先生が日本文で書かれたものなる由、あとで知りました。

三月の雛まつりも過ぎてすでに今日は九日と申しますのに空はどんよりも雪もよひで、昨日も正月以来十一度目とかいふ雪がうつつすらと降りました。まだ戒嚴令下⁽¹³⁾に在り東京の人心は表面いかにも平穩に静まりかへつてをりますが、何かいきどほろしい氣持を人々はお互いに感じ合つてをります。御地はもうすっかり春でせうか。遙かに御身の上をしのびつつこの蕪雜な手紙をさし上げます。匆々不盡。

三月九日 東京にて 松枝茂夫

住所、東京市杉並区成宗三ノ三四七

19360315Z 【周作人↓松枝茂夫】

松枝先生

接讀鄭重の手書、併雜誌二冊、且感且愧。『支那語學』前承文求堂見賜、貴文已得讀、知有拙文集之翻譯、甚引以爲榮、但恐淺薄之作不值得出版耳。拙文中常聞有南方方言、慮須多費注解、如烏篷船中之貓兒戲係女優演劇之俗名、雖然平時女優並無「猫」之稱、鄙意或因歌唱時之高音有似猫叫乎。拙文中有排印錯誤或澀曲費解處、如承下問、即當奉答。春寒尙厲、請希珍重。專此順頌。

近安

周作人 啓

三月十五日

19360321M 【松枝茂夫↓周作人】

周作人先生

さきは大へん蕪雜な手紙を差上げ、われながらはづかしく存じて居りましたところ、昨日思ひがけずも玉翰をいただき嬉しくて昨晩はよく睡れなかつた程でございました。厚く厚く御禮申し上げます。何卒これからも宜しくお願ひいたします。「猫兎戯」についての御教示有り難うございます。実を申しますと「烏篷船」はろくにわからずに訳した所が多く、第一題目からして、私は蓬は帆とばかり思ひ込んで居つたのですが、友人からトマぢやないかと突込まれて駭然といたしました。成程苦と解すれば、今までどうしても合點の行かなかつた三明瓦以下の御文章(15)がいくらか辻褄が合うやうです。私の翻譯は一事が萬事大抵そんなところだらうと、今更ながら先生に対しても申しわけなく、何だか恐ろしくなつてしまつたのでございます。何でも聞け、答へてやらうとの御親切なお言葉に甘へて、さぞ御迷惑の御事と恐縮に存じますが、たつて御願ひいたしましたうございます。

「一年的長進(16)」の冒頭の一句、「在最近五個禮拜裏、一連過了兩個年、這才算真正過了年、」は閏年か何かの故でせうか？ 又最後の「有方尊命」とは何といふ意味でせうか、おかどちがひといつたところかと推してみましたけれど。

「勝業」では「蝦蟇墊牀脚」といふ諺と、「征蒙」の意がわかりません。

「閉戸讀書論」のうち「二十年後又是一條好漢」とは二十年後又一个の好漢として生れがはつてくる意でせうか。又これは誰かの故事でせうか。「只有上聯而無下聯」もわかりません。上身下身とちがひませうか。「此刻現在」と

いふ語にはよく括弧をお付けになりますが、「今日ただ今」とかいった字面上の意義以外に何か別に含むところがあるのでしょうか。「青蓮」とはよもや青年運動の略でもなからうし、紅蓮（鴻運かソビエト運か）の反対かという考へましたが合点が行きません。「非真關札則不把卷」も解しかねてゐます。又「農軍起事」とはやはり赤匪を指すのでしょうか。

「上下身」四行詩を五行に譯した手際は、まことにまづいと思つてゐます。「該・辦・的・下・流・社・会」はいいかげんに譯しました。初め「働かねばならぬ」ともやつてみたのですが、本当の意味はどういふのでせうか。「不必説要想・攔・腰・的・関・老・爺・一・大・刀」分個上下」の攔の字がわかりません。又「抽刀断水」「揮劍斬雲」は何かの術語でせうか。多分字面以外に意味があると存じますが。

「薩滿教的禮教思想」中、「君師主義」の諸位とは、単に道学先生といふ意味でせうか。「孟子」なんかのむづかしい意味があるのでしょうか。

「死法」の中、「北京学府中静坐道友」とは、当時岡田式静坐法でも流行つたのでせうか？ 又「磕破天靈」「胖大海」「酸牛奶」など解かりません。

「碰傷」の譯語に困りましたが、日本語で何と譯すべきでせうか。又「未必同舟皆敵國、不圖吾輩亦清流」を御説明ねがひたうございます。

「北京的茶食」茶食は「茶食ちやうけ」「茶菓子」とやるべきだとなやみました。五十嵐氏の本(17)ではただ「菓子」とあるやうでしたから假りに「北京の菓子」と譯しましたが、如何でせうか。「香合かうば」を香盒とし、「花露水」と「日光皂」とにああいったいかげんな註を施してみましたものの、実は不安でならないのです。

「喫茶」にはむづかしい所が澤山あります。「加薑絲醬油、重油燉熱……」の重油とは何でせうか。下関の江天閣

とは南京の料亭の名でもあるのでせうか。又そのあとの「因爲一到即罄……」以下の二行をお願いいたします。
 「烏篷船」の「黒油」は黒ペンキでいいのでせうか。「定篷」とは？「遮陽」はたぶん日覆いでせうか。「船首有竹篙 用以定船」の定は或は方向を定めるのかとも考へますが如何でせう。

「喫菜」ではまづ「自鄧以下更可以不論」がわかりません。又「光是」とは全くともいって意味でせうか。

「蒼蠅」では最後節の「默啞咬他直達他的心房」の意味を御教示下さい。他は何を指すのでせう。

「窮袴」では「左儀貞」なる人物が見当つきません、又「小藍皮書」もお願ひいたします。

「三禮讚」、「試看両閭林々總々」の両閭は両儀の間、天地間と解していいでせうか。「孝然獨處」の孝然？ 又、「孫馨帥」は孫伝芳（字馨遠？）の事かと思ひますが、馨帥とは、元帥の意味でせうか。

「前門遇馬隊記」の「天安門外第三十九個帳篷」の帳篷は露店のテントでもあるのでせうか、第三十九個？

「故郷的野菜」の児歌第一行、「靱結結」とは堅い意でせうか、丸いのでせうか。

「我学國文的經驗」の「背書上書」？

いい気になってこんなにも澤山ならべてしましました。しかも実は決してこれだけに止まらないので、況や自分でわかつてゐるつもりでとんだ譯し方をしてゐるのが無限にあるだらうと恐れます。つくづく自己の無学をばづかしく思ひます。先生の御清適をお騒がせいたしましたのを懼れます。何よりもそれが苦痛でございます。

寒さ漸く去って春めいた陽光が射しそめました。はじめて北京の地を踏んだのは忘れもせぬ六年前の四月七日、楊柳の絮が空いっぱい飛び狂ふのを驚歎の目をみはって眺めたのも、今から思へば夢のやうです。遙かに先生の上をしのびつつ、草々不一。

三月廿一日

松枝茂夫 鞠躬

19360407Z 【周作人↓松枝茂夫】

松枝先生：

惠書誦悉。承問各事，今別紙奉答，匆匆未能詳，乞恕之。又新出拙文一冊附呈，希惠存。萬々順頌。

近安

四月七日

周作人啓

一、〈二一年的長進〉 過了兩個年指新曆及舊曆（太陰曆）的新年。有方尊命之方，意作違背解，謂不能遵命辦理。

二、〈勝業〉 蝦蟇墊牀腳，是紹興俗諺謂無力負擔。征蒙者民國九年外蒙赤化問題發生，徐樹錚等宣傳征蒙。

三、〈閉戶讀書論〉 二十年後云云是生まれがはつてくる之意。強盜惡漢被處刑時常如此說。只有上聯而無下聯。即指一失足，等十四字。謂再回頭，云云現在已不可能也。此刻現在，意本重複，因吳稚暉說話常如此，故引用之，別無他故。

青運即青年運動國民政府曾有停止青運之語，關札即關戶。相傳有好奇者寫啓戶為關札，傳為笑柄。今只解作非真開戶則不讀書也。農軍起事，即共產派文人口气。

四、〈上下身〉 該辦的，本係某人⁽¹⁹⁾所說，意謂懲らさなければならぬもの。攔腰只是談在腰的正中間。⁽²⁰⁾

抽刀，揮劍，無別的意象。只是說徒然無用。

五、〈薩滿教的禮教思想〉。君師主義。高一涵在《新青年》上曾有一文用此題。反對政府干涉思想。此語本於君作之師。謂政教合一制度。

六、〈死法〉。靜坐。因是子之孫參攷岡田式著。靜坐法。在北京各校講演傳授。磕破天靈即顛骨破裂。只說得稍遊戲耳。

胖大海。藥名。狀如橄欖。浸熱水中則漲大數倍。食之云可以治咳嗽。今以形容。土左衛門。酸牛奶。俄醫學博士メチニコフ云服之可以殺除有害細胞。以至長生。

七、〈碰傷〉。原意云自己碰而受傷。非由他人加害。或者譯為。怪我。如何。招商局輪船名。江永。國務總理即段祺瑞。挽聯對於段氏蓋甚致不滿。㊸㊹敵國出處在《史記·吳起傳》。清流在《唐書·裴樞傳》。均見岡田一故事此處利用舟與水兩事作聯意云。同舟的人未必皆是敵國(而今却以敵人相待)。我輩平凡的人不圖也成了清流(乃被投入濁流而死)。

八、〈北京的茶食〉。茶食原意是茶うけ。現今只作お菓子可矣。

九、〈喫茶〉。重油燉熱之油。係湯字之誤。重湯燉。猶如日本之爛。江天閣舊時在南京的一茶店。只賣茶與點心。一到即罄云云謂如一到即喫畢。ボイ又拿第二碗來。不勝其煩。但如長久不喫。ボイ先來添加麻油(胡麻油)于干絲之上。表示好意。(實亦即是催促。大抵此時如喫了。最好。第二碗也取不來。)及添三次之後仍不喫則ボイ便憤然撤去。招待粗忽。

使客將不歡而散。喫茶的興趣完全消失了。

九、〈烏蓬船〉。黑油者黑色的桐油。桐油或通者紹興船蓬皆半圓形。以竹片編成。四ツ目。籬狀。中夾大竹葉。屈兩端

著船兩邊。不可移動者名定蓬。兩定蓬之間空三四尺大約為一蓬之地位。上加一蓬可以移動。晴時移在定蓬之上。雨時則移覆兩定蓬之空間。以凌雨雪。船之佳者兩定蓬之空間置一。明瓦。即以木作格子。亦半圓形。格子中嵌以

明瓦。微透明的。魚鱗似的。魚。大者有明瓦四枚。即稱四明瓦船也。

(以下は欄外に書き込み…小川)

遮陽は日よけ、布製、覆于明瓦上。

以定船、定はとめる。船之首尾各有一穴、停泊時以竹竿直貫至水底、使船不動。

十、〈喫菜〉 以自鄩而下、《左傳・季札觀樂》曰、以自鄩而下、無譏焉。謂《國風》中、以自鄩風以下、均不足道、今只引用、言此等不足論耳。以光是 即、只是。

十一、〈蒼蠅〉 以默亞咬他、他指男子、隱含戀愛意、一面可作、蒼蠅咬、解、一面可解作、女人的愛傷了他的心、此是言語的洒落不易譯、得明白。

十二、〈窮袴〉 左儀貞見彈詞《天雨花》中、是小說中模範的貞女才女、小藍皮書 (Little Blue Book) 美國 E. Haldeman Julius 所發行。

十三、〈三禮贊〉 兩間、天地間。孝然、焦先的號。孫擊帥即孫傳芳、帥者官僚中對於軍閥的尊稱。

十四、〈遇馬隊記〉 帳篷軍隊的、テント、當時為彈壓學生運動、有兵若干駐於天安門前。

十五、〈故鄉的野菜〉 韌結結、紹興俗語即、韌、意、堅くして柔か、有彈性的形容詞。

十六、〈國文經驗〉 背書暗誦、上書、每日講授未曾讀過的書。

19360416M 【松枝茂夫↓周作人】

周作人先生…

お手紙いただきました。嬉しさ有りがたさ、本当にどう申し上げて御礼すればよいかわかりません。あのゴテく

並べ立てた私の愚問に「一々丁寧な御教示を賜りたゞ、恐縮に勝へません。

別して又御新著を惠送にあづかり厚く御礼申し上げます。早速あらかた拝讀致しました。「冬天的蠅」その他「日本の衣食住」など譯してみようと考へてをります。

曾て「周作人自述」を譯しましたが、あの中の「生于光緒甲申、其實却是一八八五了」とはどういふ意味で御座いますか。又「六年至北京任北大附屬國史編纂處編纂員半年、七月改任北京大學文科教授」はこれでいいのでせうか。この「七月」は「七年」の誤植ではないかと思ひますが。

「蒼蠅」の中の「戯棍」(『澤瀉集』)には「嬉棍」は『中國文學』六号所載実藤氏の譯のやうに「棒遊び」とやつてよろしいのでせうか。

「北溝沿通信」の「北溝沿」は先生の御宅のあたりを云ふのでせうか。それとも北京大學あたりを云ふのでせうか。北京の地理にもすつかり暗く、地圖も手元にありませんので、見当がつきません。

「體罰」の中の「跪錢板」「螺螄壳上」、それから「做」とは即ち拷問のことをいふのであらうと考へますが、ハッキリした所がわからず困つてをります。まことに恐縮でございますが、これらの諸事に付き、極く簡単に結構で御座いますから、どうか御指示願へばと存じます。

当地は丁度今が櫻の満開頃でございます。

この前の日曜から月曜にかけて生憎大雨が續いて花は一寸出鼻を折られた格好です。この次の日曜といふのもう遅すぎる事と思はれます。櫻もそろそろ散らうといふのにまだ時々外套が欲しいやうな風で昨年の「櫻音頭」の狂歌乱舞が見られぬのは、まあ却つて幸ひかも知れません。尤も飛鳥山あたりではくしゃみしながら寒い花見に浮かれた人も出てゐる由、新聞に見えて居りますが、私の住むあたりは市内とは名ばかりの辺鄙なところで花のた

よりもうとく、たゞ門前二本三もとの花を眺めるだけです。先生は金田一京助先生と御親交がお有りでせうか。金田一先生のお宅は小宅からすぐ四五軒隔てたところですが、生憎引越し蕎麦をくぼる程の隣りでも近くなく、又学校時代もつかいかけがつてたゞ偶然お顔をおぼえてゐるだけです。時々お姿を見受けながら、未だ御挨拶も申し上げた事御座いません。先生はこの辺の草分けの方ださうでもう十二年も前から住んでゐられるとの事でございます。

御地の春は如何でございます。是非もう一度出かけたと思ひながら日々の暮しに追はれて到底今のところ出来さうにないのが残念でなりません。先づは先生の御健康を祈りつつ。勿々不

四月十六日

松枝茂夫

19360420Z 【周作人↓松枝茂夫】

松枝先生左右

惠書誦悉。下問諸件 別紙録呈、乞察閱是幸。拙著知己蒙賜覽、惟内容空疎、又時涉散漫、如衣食住一篇、恐不足供彛譯耳。北平天氣尙不甚煖、時有風沙、則又大有春氣矣。匆匆奉覆、順頌

近安

四月廿日

周作人 啓

一、《自述》、光緒甲申即一八八四年、因生於十二月、故已是一八八五年的一月了。六年四月。至北京。至九月。改任、

均是半年。

二、〈蒼蠅〉 嬉棍 大意可作 棒遊び 解 原意是舞棍 与舞刀相似。

三、〈北溝沿〉 地名 即在八道灣之西 但今已填平 改爲馬路 名則仍存。

四、〈體罰〉 做 即拷問 跪錢板等均拷問之一種 使犯人徒或生跪於螺殼或錢板 狀如洗滌板 前家以此安 放銅錢 有穴 或銅元此安 上 至膝頭腫破。

19360503M 【松枝茂夫↓周作人】

周作人先生

玉翰ありがたく拝誦いたしました。毎度面倒な質問をくりかへして真に恐縮します。

傳ふる所に據れば先生近く御東遊の由で御座いますが本当てせうか。若しも真実とすればどんなに嬉しい事です。そして直接御教へを得ることが出来れば願ってもない事で、どうかこの噂が本当てであってくればと存じます。翻譯のむづかしさ殊に私の如き一知半解の者のやる仕事でわれながら空おそろしく覚えられて一向筆が動きません。どうか本当てであるやうにと祈つてをります。

櫻もいつの間にかあつてなく散つてしまつて、今は丁度つつじの時候です。近所の大宮八幡はつつじの名所でのころは日曜でなくとも人がいっぱい、櫻がおじさんになつたその腹癒せといふのでせうか、大騒ぎをやつて居ります。寒いくといつてあるうちに、いつかもうすっかり初夏じみて来て、昨日「金魚やーきんぎょーお」の声をきいておどろきました。

私は衣食の為に「清光緒朝中日交渉史料」の翻譯(25)に殆ど一と月の半ばを奪はれるので御座いますが、この無聊の上もない賃仕事の餘暇に、先生の書を把つて讀み且つ曲りなりにもとにかく日本文に譯してみることに楽しさは

又格別で、どうかこの仕事を先生のお力によって仕遂げたいものだと思っております。

「日本の衣食住」は譯しない方がよからうとの御言葉ですが私は大変興味深く拝讀しましたので何だか残念に思ひます。私の大體の方針は『知堂文集』から三十二三篇を採り、その他からもう二三十篇を足して凡そ六十篇ぐらゐを集めたい考へでをります。日本の讀者を眼中に入れて、どういふものを譯したらよろしいでせうか。どうか御意見を伺ひたいでございます。

なほ「北溝沿通信」と「窮袴」の御作年代が不明ですが、たゞ何年の作といふことだけでもわかれば結構でございますから御教へ下さいませんでせうか。御多忙中のこととはよくよく存じ上げながら失禮な事ばかり。どうかどうか御海容の程願ひ上げます。

御地はなほ春おそく泥沙吹きすさぶとの趣き、何卒御身体御大切にと祈り上げます。匆々不尽

五月三日

松枝茂夫拜

19360718Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓、接讀手書已有兩月、因家中有病人、未及奉答、甚歉。承詢拙文寫作年代、查（窮袴）作於民國廿一年、（北溝沿通信）係投寄《薔薇周刊》⁽²⁷⁾者、編者石評梅女士於十七年逝世、此文當在十六年冬所寫也。拙文甚少可觀者、倘得因尊譯而蒙貴國士人之一睽、斯甚幸矣。此上

松枝茂夫先生座右

周作人 白

七月十八日

*編者注記…以下の部分は松枝茂夫の質問の手紙に周作人が回答を直接書き込んだものである。以下は明朝が松枝茂夫、ゴチック文字を周作人で区別した(書影参照)。なお、文中に用いた囲み文字は、周作人の加筆の仕方をそのまま踏襲したものが、取消線と同義である。

「鏡花縁」⁽²⁸⁾

○「四子全書」——四書の別名?

○牛角灣——何か由来がありますか? 無由来、只是成語、喻思想過深反致⁽²⁹⁾不通也。

○紀限儀——六分儀 (sextant) のこと⁽³⁰⁾か?

「我學國文的經驗」

○附讀 富家延師在家課讀、附讀於別家之塾或塾師家上學也、本文中所云係指第二場合。

○腰鼓 即日本之鼓(つ、み)。

○覆試——第二次試驗?

「榮光の手」

○牠的⁽³¹⁾双⁽³²⁾義的根據說有同樣的能力、特別是這植物從絞架旁採來的。(『知堂文集』214頁) 双^{フタマタ}叉^{マタ}的根。

○麥食 麥粉之食品

「案山子」

○「驚閨」——その原語？ 宋周密《齊東野語》云、用鐵數片長五寸許、闊二寸五分、如拍板様、磨鏡、匠手持作聲、使閨聞知之、曰驚閨。

甲○螺螄霉豆腐千張（見別紙）

「苦茶菴笑話選序」

○「張貌」（同書七頁） 兒童遊戲之一（居ないくボウと同じ）

○酒渣鼻（九頁） 赤鼻

○把一個囪、圍、的、太、極、兒、弄、得、粉、花、碎（15頁9行）|| 整個。

○只這些未了精々兒——（16頁末行） 精々兒空々兒見（聶隱娘傳）《太平廣記》亦見（劍俠傳）中明人所集
中係神話的劍俠未了大抵謂其尚未成就仙道乎。

○呀、笑殺了他的咱、却元來就是我的你。（17頁七行）

○因人己一如、故他即是咱、我亦即是你也。

○竊聞堯舜中天方屬正午（19頁） 舊說古今一旦暮、堯舜在世如日中天、時當正午、以後漸々就暮矣。

○萬億陪堂（20頁二行）——見物人？

○因與口先鋒約曰、今夕大悶、賴、爾、能、願、我、……（20頁七行）

假設口爲先鋒官、官上文有傳置、故是也 賴爾能願我。 頓||養

○然則笑倒乎，哭倒也。集笑倒。(21頁八行) 人世可悲，故所謂笑倒，實乃哭倒也。於是乃集『笑倒』爲一書。
乙○「伽藍[㊦]菩薩」 伽藍菩薩之略語，說明見別紙。

「顏氏學記」

○「四存學會」——いつ如何なる人によつて設立せられた？ 徐世昌氏所設立，因顏氏有「四存編」以爲名。

「希臘神話二」

○離奇恠(夜讀抄110頁) 奇怪不可思議

○「大頭天話」(111頁) 紹興語，謂不可憑信之「昔話」。

○福都思主教(116頁) Photius (九世紀時人)

「笠翁與隨園」

○明正兩觀之誅 《孔子家語》、孔子爲魯司寇，攝行相事，誅大夫少正卯，戮之於兩觀之下，原注，兩觀，闕名。
案宮闕名。

「文章的放蕩」

○格勒威耳 Greville 謨耳 Moore

○拉忒勒耳 Luttrell 洛及斯 Rogers

「關於焚書坑儒」

○「四書味根錄」 八股文時代所盛行的四書講義書

「畏天憫人」

丙○茅山道士諱虎噬爲飛昇，稱被殺爲兵解。（見別紙）

「關於傅青主」

丁○字亦何與人事，政復恐其帶奴俗氣，若得無奴俗氣，乃可與論風期日上耳（《風雨談》三頁（見別紙）

○戴安道之子仲若双柑沽酒聽黃鸝（四頁） 戴仲若顛爲戴安道達之子，双柑斗酒聽黃鸝，見《雲仙雜記》。

○胡人害奴病，自有胡醫與胡藥（3頁）——胡病の誤植

「游山日記」

○飢腸得此不翅江瑤柱（10頁） 不翅＝不啻，通俗用作「不殊」解謂無異得食江瑤柱（帆立貝の柱）

○雖無損於性情，猶未平於嬉笑（11頁） 嬉笑（怒罵）之氣猶未能平。

戊○卷八記郡掾問鐵瓦

○卷九紀蝟髻蛙腹者拜烏金太子 見別紙

「關於雷公」

○自己落實者曰悶雷（『瓜豆集』14頁）落實意不甚明白，大抵是說酒令中結果落在自己身上罷？

「談鬼論」

○這種解釋難免為姚首源所評為癡叔（18頁）姚首源即姚際恒。著《詩經通論》，對於舊說多有所訂正。常笑人為癡叔，此蓋即是通用語「笨伯」之異稱耳。

○紅勒帛（23頁）考官見文章不佳，以硃筆抹之。後遂有此戲稱。

○段君誠不愧為三十六之一。段成式，李商隱，溫庭筠在當時文壇上稱為三十六體，因三人行輩均是十六也。

「東京的書店」

○色剛姆與尼珂耳合編的英文史 T. Succombe & W. R. Nicoll.

「希臘人的好學」

○勝家博士 Dr. Charles Singer シンガー縫衣機器會社 中國舊譯勝家公司

「陶菴夢憶序」

○此外，就是平常的一山一河，也都還可隨便游玩，得少佳趣，倘若你有適當的游法。——こ、は序跋文（147頁）にも『澤瀉集』（25頁）にもさうなつてゐますがこれで宜しいのでせうか？ 不少佳趣ではなからうかと疑つて

ひますが。得少佳趣スツシ

○師爺 民國以前知縣以上之地方官所聘用之助理員、普通分刑名（司法）錢穀（財政）兩部、稱刑名師爺、錢穀師爺。因係聘任而非下屬、須以賓客之禮相待。主人（官吏）相見時稱之曰老夫子。一般通稱則云師爺、猶言先生樣。

○錢店官 兩替屋の番頭

（周作人が追加した別紙）

甲 螺螄、似田螺タニシ而小。霉豆腐、豆腐小塊使發酵、加塩。霉千張亦同、千張似ユバ而更厚。

乙 伽藍菩薩略稱爲伽藍菩、作爲「殺」字之隱語、因薩殺音同也。

丙 茅山修道者爲虎所食、輒語人云某已飛空升天矣、又修道者被殺、古來多稱爲兵解、謂其人並未死、但借刀兵而解脫以去耳。

丁 書法好壞本與人事無關。但只怕其帶奴俗氣耳、若能無奴俗氣、乃讒說的則風期日上耳。風期大抵可作風格或風標解罷？

戊 《游山日記》卷八 官自後山還前殿、終不拜佛、蓋亦崇正學闢異端有道之士也。亦不屑賞鑿天池。但仰面望鐵瓦曰、生鐵乎熟鐵乎、僧對曰、生鐵、復問落雨時池水溢乎。對曰不溢。官曰亦溢耶。蓋緣僧畏官而喉不響。官傲僧而聽不卑。故兩誤耳。

又卷九 亭午數游人相遇。知客僧延欸甚殷。一鬚髯蛙腹者、——將赴齋而知客之緣簿已出。四人者見幾而作。其一泊蛙腹二人遂及於難予惻、然惑之、蓋以腹大行遲也。二人既攢眉忍痛樂助已。知客始出其烏金太子使二客拜

而觀焉。客乃踞踏升階、洞洞乎炷香稽首、適之然驚顧相語曰、此烏金也。直不知幾倍赤金。

19360730M 【松枝茂夫↓周作人】

周作人先生

久しく御無沙汰に打過ぎました処、過日ハ玉翰賜り恂に有難く存じました。御家中御病人お有りの由、酷暑の折柄さぞかし御困りの御事と御察し申し上げます。当地も連日旱天つゞきにて甚だ凌ぎがたく小生も三四日病臥いたしました。御地は尚ほの事とぞんじます。何卒御大切にひとへに祈り上げます。

扱^さて先日より友人のすゝめにより山本書店より先生の随筆集（とまでは申せません僅か九篇六十頁余の小冊です）を出すことになりました。書名は、北京の菓子、これハ本屋の方で決めたものです。月末までには出版できるとの由で御座いましたからもう間もなくお送り出来ます事と存じます。

御地留学中の松井秀吉⁽²⁹⁾は小生の高等学校以来の親友で御座います。四月先生の御警咳（ママ）に接し得た喜びの報を得て羨望を禁じ得ませんでした。小生にも早くそういふ時が来ればと存じます。 勿々不一

七月卅日

松枝茂夫拜

注(1) この周作人遺族宅に架蔵される松枝書簡は、もともとは文化大革命の際に「抄家」（反革命の証拠探しを名目で家財を収奪すること）され、魯迅博物館で保管されていたが、近年ようやく返却を受けたものであるという。

(2) 中国語教科書ながら、翻訳を含むものとして、『支那現代文』（共立社一九三三年）、『周作人随筆抄』（文求堂一九三九年）がある。

(3) 周作人書簡は松枝茂夫自身の手で周到に管理されていたので、周作人書簡には欠落はほとんど無いが、松枝書簡についてはかなり欠落がある。

- (4) 当時、松枝茂夫は法政大学ほかで非常勤講師を務めていた。
- (5) 周作人は一九三四年七月から夫人の羽太信子らを伴い、八月末まで東京に滞在した。その間、日本滞在中、新聞雑誌の取材を多数受け、さながら時の人といった趣を呈した。当時の『周作人日記』（大象出版社一九九六年）によると、八月四日夜、宿に迎えの人力車が来て、日比谷の中華料理店山水樓の招宴に出席した。十一時半ようやく帰宅したと記され、かなりの盛会であったことが窺われる。また歓迎宴に出席者二十一名の主だった者の名前として、有馬生馬、柳沢健、佐藤春夫、島崎藤村らを挙げている当日の様子は、柳沢健「周・徐先生を迎へて」（『支那』二十五卷九号）などで紹介された。
- (6) 一九三五年の夏頃、松枝茂夫は林語堂「笑」（『中国文学月報』四号、一九三五年六月）、董康「支那文学我見」（『東亞』八卷七号、一九三五年七月）、林語堂「小品文の遺緒」（『中国文学月報』六号、一九三五年八月）、劉半農「双鳳凰專齋小品文・三則」、梁宗岱「詩を談る」（『中国文学月報』七号、一九三五年九月）と、立て続けに翻訳しており、本格的に現代文学翻訳に取り組み始めた頃に相当する。だが、周作人については翻訳を試みたものの、容易ならざることを感じて、当面発表を見合わせたとと思われる。
- (7) 『雨天の書抄』（『文芸懇話会』一卷三号）には、「北京の菓子」（『北京的茶食』）、「雨天の書」（『酒を語る』）、「談酒」（『澤瀉集』）、「烏蓬船」（同題）、「澤瀉集」、「上下身」（同題）、「雨天の書」、「死の默想」（『死の默想』）、「雨天の書」五編を収録している。これら五編は全て『北京の菓子』にも収録された。なお、『文芸懇話会』は、警保局長の松本学の肝いりで発足した官製文芸雑誌ではあるものの、当時は比較的リベラルな編集方針のもとに発行されていた。この『文芸懇話会』には翌年一九三六年にも周作人「日本文化を談るの書 其一」（二卷六号）を掲載している。
- (8) 「周作人先生の立場」（支那語学会『支那語学報』創刊号、文求堂）を指す。文求堂主人とは田中慶太郎のこと。飯倉照平編になる略年譜によれば、松枝茂夫は留学帰国後、田中の知遇を得て、『現代支那趣味文選』（一九三四年六月）、『支那語を読む爲の漢字典』（一九四〇年一〇月）などを文求堂から刊行したほか、店先で亡命中の郭沫若を紹介されたという。
- (9) 「原稿をはたられ」は「原稿を催促取り立てられる」意。
- (10) 教科書『支那現代文』（共立社一九三三年）のこと。そのなかに、広告文、雑件、白話文を収め、白話文の教材として、「白話文学史引子」（胡適）、「金簾篇今訳」（顧頡剛）、「西山小品二則」（周作人）、「笑」（謝冰心）、「日記三則」（郁達夫）、「詩三篇」（徐志摩、郭沫若）を収める。
- (11) 現在のところ、何に拠ったか特定できない。
- (12) 「二個郷民的死」、「賣汽水的人」は「生長する星の群」第一巻九号に「西山小品」を構成する二編として、それぞれ「一人の百姓」、「サイダー賣り」と題して掲載された。
- (13) 二二六事件のこと。当時松枝茂夫は杉並区に住んでいた。
- (14) 「尚」を消して、「常」と書いている。
- (15) 「三明瓦以下の…」とは、原文第二段落の途中に現れる言葉で、具体的に船を覆う苫（トマ）の形状について説明する箇所を指す。
- (16) この書簡中では書籍タイトルに波線を付けていたが、表記を統一して、カギ括弧とした。以下に掲げられる作品は『知堂文集』（天馬書店一九三三年三月）から選ばれた作品とみられる。同書は一九二〇年代の代表作を中心に集めたもので、ここで松枝が選んだ作品は内容的にも

- 時期的にもかなり幅があり、「窮袴」(一九三二年二月)のように『知堂文集』で初めて単行本収録された新作も含まれている。これらの作品はすべて改造社版『周作人隨筆』に収録され、周作人の全貌が窺える作品集として意図していたことが明瞭に窺われる。
- (17) 「北京的茶食」に見える五十嵐力「我が書翰」(至文堂書店、一九一六年刊行)を指す。
 (18) 時期的に見て、『苦竹雜記』(上海良友圖書印刷公司一九三六年二月)と思われる。
 (19) この箇所は割り注の形式で記入されている。
 (20) 在、正は右側に添え書きされている。
 (21) 「除」は右側に添え書きされている。
 (22) 池田故事熟語大辞典とは、『故事熟語大辞典』(池田四郎次郎著、宝文館)を指すものと思われる。
 (23) ボイはボーイのこと。
 (24) 日本における何らかの報道によったものと思われるが、未詳。
 (25) 「清光緒朝中日交渉史料八八卷」(北平故宫博物院編、一九三二年)を指していると思われるが、翻訳の存在は確認できない。
 (26) 恐らく母親のことと思われるが、確認できない。
 (27) 『薔薇周刊』は『世界日報』副刊で、一九二六年より石評梅・陸晶清らが編集発行したものである。
 (28) 以下に掲げられる作品名の出典を記す。すべて富山房版『周作人文藝隨筆抄』に全て収録された。この時期から早くも文藝論を中心とした近作を中心とした翻訳を刊行しようと思図していたことが窺われる。
- 『自己的園地』(北新書局改訂新版一九二七年二月)「鏡花縁」
 『澤瀉集』(北新書局一九二七年九月)「陶菴夢憶序」
 『永日集』(北新書局一九二九年五月)「榮光之手」
 『看雲集』(開明書店一九三二年一〇月)「案山子」
 『苦茶菴笑話選』(北新書局一九三三年一〇月)「苦茶菴笑話選序」
 『夜読抄』(北新書局一九三四年九月)「顔氏学記」「希臘神話」二
 『苦竹雜記』(良友圖書公司一九三六年二月)「關於焚書坑儒」「笠翁與隨園」「文章の放蕩」「畏天憫人」
 『風雨談』(北新書局一九三六年一〇月)「關於雷公」「談鬼論」
 『瓜豆集』(宇宙風社一九三七年三月)「關於雷公」「談鬼論」
 「東京の書店」
 「希臘人的好學」
 旧制福岡高校時代からの友人。一九三七年に中国大連で客死。松枝茂夫との共編で『周作人著訳目録』(『中国文学月報』二十九号)がある。